

第29回 郷土先賢室顕彰者紹介



高岡の近代都市としての基礎を築いた政治家

とりやま けいじろう
鳥山 敬二郎 (1842~1926)

鳥山敬二郎は、鳥山家第29代として天保13年（1842）に現高岡市木町で生まれた。先祖は、群馬県太田市に古くから存在した鳥山城の城主であったが、第15代治右衛門が豊臣氏に仕えた後、前田利家に見いだされ高岡の木町に根を下ろした。

敬二郎は安政5年（1858）、17歳で高岡町奉行役所見習いとなり、文久3年（1863）加賀藩砲術教授役を命ぜられた。翌、元治元年（1864）に京都で禁門の変が起こり、京都御所清和院御門の守衛のために、加賀藩47人の隊長となり活躍した。

明治元年（1868）、高岡にあった貧民小屋を廃止して、加賀藩の福祉政策の一つで金沢卯辰山にあった「撫育所」に收容することに尽力し、翌年には高岡の有志に働きかけ救援米を寄付させ、飢饉に見舞われた約5,000人の命を救った。そして、その奔走ぶりが認められ、明治3年（1870）には高岡総町肝煎役（世話役・支配役・斡旋役）を命じられ町の政治を任せられることとなった。明治4年（1871）には、肥料取引の「豊饒社」を創設し、後に藤井能三（伏木港を築港）や海内果（東京日日新聞の記者）らと高岡米商会所を創設するなど経済界への進出も果たした。

明治5年（1872）、廃藩置県後、明治政府は各地で閑地（空き地）の開発活用を進め、高岡城址（現古城公園）もその候補地となった。当時、高岡が属していた七尾県は落札者を決定し、高岡城址〔水濠を除いた約102,300㎡（31,000坪）〕の払い下げを断行しようとしていた。その払い下げの内容を知った敬二郎は、第十七大区区長であった服部嘉十郎（今の高岡市長に相当）との連名で反対運動を起し、庶民の世論を味方に公園指定に奔走した。明治7年（1874）7月、公園指定の請願書を新川県（現富山県）に提出。その請願書には、公園としての構想（博物館・美術館・図書館・遊園地を設ける計画書）がすでに描かれていた。請願運動が実を結び、払い下げは取り消され、同8年7月4日、高岡城址は「高岡公園」として正式に認可を受けた。

明治35年（1902）、立憲政友会から推されて衆議院議員に当選し国会議員として活躍した。大正時代に入り、敬二郎は政党の推薦を得て第7代高岡市長となり、中越鉄道（現城端線・氷見線等）の国営化や地区の拡張など高岡の近代化に力を尽くした。

敬二郎は江戸時代幕末から大正時代という国内政治のいくつもの転換期の中、世の為に全力を尽くし近代高岡の礎を築いた。大正15年（1926）、高岡の行く末を案じながらも84歳で静かにその人生の幕を閉じた。

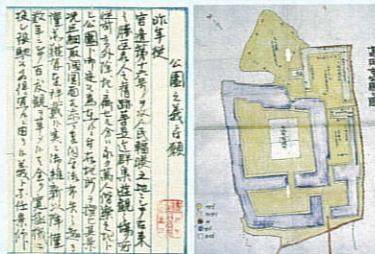
敬二郎らが残した古城公園は「さくらの名所100選」「日本の歴史公園100選」に選定されるなど、自然あふれる水濠公園として市民や観光客から今も親しまれている。

〈専門員 福田 暁〉



〈鳥山成一氏所蔵〉

第7代高岡市長就任後まもない頃の記念写真
(旧高岡市役所前)
大正2年頃



〈高岡市立博物館所蔵〉

※高岡公園指定
請願書(写)
明治7年
※高岡公園指定
請願書附属絵図
明治後期写